

idol books 24 for junior



- ジュニア文学名作選
- 宮沢賢治

風の又三郎

IDOL BOOKS

風の又三郎

宮沢賢治



不許複製

NDC 913

8093-035024-7764

著者との話し合いにより
検印廃止

風の又三郎

アイドル・ブックス・24

著者・宮沢賢治 みやざわけんじ

発行・昭和46年4月10日 第1刷 ©

昭和58年11月30日 第27刷

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京41149271番

印刷所・誠文社印刷所

製本所・島田製本株式会社

目次

鹿踊りのはじまり	四
祭の晩	六
慶十公園林	三
風の又三郎	三
詩十五編	八
或る農学生の日誌	七
フランドン農学校の豚	一五
植物医師	一五
詩十編	一六

からすの北斗七星^{ほくとしちせい}

一三

グスコープドリの伝記^{でんき}

一七

銀河銀道の夜^{ぎんがてつどうよる}

三〇

手帳より^{てちよう}

三七

解説
年譜

堀尾青史

三二

装幀 福原幸男
さし絵 久米宏一

三〇

風の又三郎

宮沢賢治

鹿踊りのはじまり

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこにねむりますと、ざあざあ吹いていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山のほうや、野原に行なわれていた鹿踊りの、ほんとうの精神を語りました。

そこらがまだまるつきり、たけ高い草や黒い林のままだったとき、嘉十はおじいさんたちと北上川の東から移ってきて、小さな畑を開いて、粟やひえをつくっていました。

あるとき嘉十は、栗の木から落ちて、少し左のひ

ざを悪くしました。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊まつてなおすのでした。

天気の良い日に、嘉十も出かけて行きました。糧とみそとなべとをしょつて、もう銀いろの穂を出したすすきの野原をすこしびっこをひきながら、ゆっくりゆっくり歩いて行つたのです。

いくつもの小流れや石原を越えて、山脈のかたちも大きくはつきりなり、山の木も一本一本、すぎごけのように見わけられるところまできたときは、太陽はもうよほど西にそれて、十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてぎらぎら光つてかかりました。

嘉十は芝草の上に、せなかの荷物をどっかりおろして、栃と粟とのだんごを出して食べはじめました。すすきはいくむらもいくむらも、はては野原いっぱいのように、まっ白に光つて波をたてました。

嘉十はだんごをたべながら、すすきの中から黒くまっすぐに立っている、はんのきの幹をじつにりっぱだともいいました。

ところがあんまり一生けん命あるいたあとは、どうもなんだかおなかがいっぱいのような気がするのです。そこで嘉十も、おしまいに栃のだんごを栃の実のくらい残しました。

「こいづば鹿さ呉でやべか。それ、鹿、きて食」と嘉十はひとりごとのようにいって、それをうめばちそうの白い花の下におきました。それから荷物をまとしよって、ゆっくりゆっくり歩きだしました。

ところが少し行ったとき、嘉十はさっきのやすんだところに、手ぬぐいを忘れてきたのに気がつきましたので、急いでまた引返しました。あのはんのかの黒い木立がじき近くに見えていて、そこまでもどるぐらい、なんのことでもないようでした。

けれども嘉十はびたりとたちどまってしまいました

た。

それはたしかに鹿のけはいがしたのです。

鹿が少なくとも五、六びき、しめっぱいはなづらをずうっとのぼして、しずかに歩いているらしいのでした。

嘉十はすすきに触れないように気をつけながら、爪立てをして、そつと苔を踏んでそつちのほうへ行きました。

たしかに鹿はさっきの栃のだんごにやってきたのでした。

「はあ、鹿だあ、すぐにきたもな」と嘉十はのどの中で、笑いながらつぶやきました。そしてからだをかがめて、そろりそろりと、そつちに近よって行きました。

一むらのすすきの陰から、嘉十はちょっと顔をだして、びっくりしてまたひっこめました。六びきはかりの鹿が、さっきの芝原を、ぐるぐるぐるる環

になつてまわつてゐるのです。嘉十はすすきのすきまから、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちょうど一本のはんのきのいただきにかかつていましたので、そのこずえはあやしく青くひかり、まるで鹿の群れを見おろしてじつと立っている青いきもののようにおもわれました。すすきの穂も、一本ずつ銀いろにかがやき、鹿の毛並みがこゝろにその日はりつぱでした。

嘉十はよろこんで、そつと片ひざをついてそれに見とれました。

鹿は大きな環をつくつて、ぐるぐるぐるまわつていましたが、よく見るとどの鹿も環のまんなかのほうに気がとられてゐるようでした。その証拠には、頭も耳も目もみんなそつちへ向いて、おまけにたびたび、いかにも引っぱられるように、よろよろと二足三足、環からはなれてそつちへ寄つて行きそつちにするのです。

もちろん、その環のまんなかには、さっきの嘉十の柵のだんごがひとかけおいてあつたのですが、鹿どものしきりに気にかけてゐるのは決してだんごではなくて、そのとなりの草の上にくの字になつて落ちてゐる、嘉十の白い手ぬぐいらしいのです。嘉十は痛い足をそつと手で曲げて、苔の上にきちんとすわりました。

鹿のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなはわかるがわる、前あしを一本環の中のほうへ出して、今にもかけ出して行きそうにしては、びっくりしたようにまた引っこめて、とつとつとつとつしずかに走るのです。その足音は気もちよく野原の黒土の底のほうまでひびきました。それから鹿どもはまわるのをやめて、みんな手ぬぐいのこちらのほうにきて立ちました。

嘉十はにわかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂の

ような気持ちで、波になつて伝わってきたのでした。

嘉十はほんとうにじぶんの耳を疑いました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「じゃ、おれ行つて見で来べが」

「うんにゃ、危ないじゃ、もう少し見でべ」

こんなことばもきこえました。

「いつだかのきつねみだいに口発破(くちまつぱ)などさかかつてあ、つまらないもな、たかで栃の(とち)だんごなどでよ」

「そだそだ、まったくだ」

こんなことばも聞きました。

「生きものだがもしれないじゃい」

「うん。生きものらしどごもあるな」

こんなことばも聞きました。そのうちにととうと一びきが、いかにも決心(けつしん)したらしく、せなかをまつすぐにして環(わ)からはなれて、まんなかのほうに進み出ました。

みんなはとまってそれを見ています。

進んで行つた鹿は、首をあらんかぎりのばし、四本のあしを引きしめ引きしめ、そろりそろりと手ぬぐいに近づいて行きましたが、にわかにはびく飛びあがって、いちもくさんににげもどつてきました。まわりの五ひきもいっぺんにぱつと四方へちらけようとなりましたが、はじめの鹿が、びたりととまりましたのでやつと安心(あんしん)して、のそのそもどつてその鹿の前に集まりました。

「なじよだた。なにだた、あの白い長いやづあ」

「縦(たて)にしわのよつたもんだけあな」

「そだら生きものだないがべ、やつぱりきのこなどだが。毒(どく)きのこだべ」

「うんにゃ、きのごだない。やつぱり生きものらし」

「そらが。生きものでしわうんとよつてらば、年老(としよ)りだな」

「うん年老(としよ)りの番兵だ。ううはははは」

「ふふふ青白(あせしろ)の番兵だ」

「ううははは、青じろ番兵だ。」

「こんどおれ行つて見べが。」

「行つてしろ、大丈夫だ。」

「食つつかないが。」

「うんにゃ、大丈夫だ。」

そこでまた一びきが、そろりそろりと進んで行き
ました。五ひきはこちらで、ことりことりとあたま
を振つてそれを見ていました。

進んで行った一びきは、たびたびもうこわくて、
たまらないというように、四本のあしを集めてせな
かをまろくしたりそつとまたのばしたりして、そろ
りそろりと進みました。

そしてとうとう手ぬぐいのひと足こつちまで行つ
て、あらんかぎり首をのばして、ふんふんかいでい
ましたが、にわかにはねあがつてにげてきました。
みんなもびくつとしていっぺんににげだそうとしま
したが、その一びきがびたりととまりましたのでや

つと安心して五つの顔をその一つの頭に集めまし
た。

「なじよだた、なして逃げてきた。」

「噛じるべとしたようだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかく白どそれがら青ど、両方
のぶぢだ。」

「においあなじよだ。においあ。」

「柳の葉みだいなにおいだな。」

「はでな、息吐でるが、息。」

「さあ、そごば、気づけないがた。」

「こんどあ、おれあ行つて見べが。」

「行つてしろ。」

三番目の鹿がまたそろりそろりと進みました。そ
のときちょっと風が吹いて手ぬぐいがちらつと動き
ましたので、その進んで行った鹿はびくくりして立
ちどまってしまい、こつちのみんなもびくつとしま

した。けれども鹿はやっとまた氣をおちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、とうとう手ぬぐいまで鼻さきをのぼしました。

こっちでは五ひきがみんなことりことりとおたがいにならずきあっておりました。

そのときにわかに進んで行った鹿が卒立ち^{そふだち}になっておどりあがってにげてきました。

「何^なしてにげできた。」

「氣味悪^{きびわ}くなてよ。」

「息吐^{いきつ}でるが。」

「さあ、息の音あさないがけあな。口も無いようだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがったな。」

「そだらこんだおれ行^いって見^みべが。」

四番目の鹿が出て行きました。これもやつぱりびくびくものです。それでもすっかり手ぬぐいの前ま

で行^いっていかにも思^{おも}いきったらしく、ちょっと鼻を手ぬぐいに押しつけて、それから急いで引^ひっこめて、いちもくさんに帰^{かえ}ってきました。

「おう、柔^なつけもんだぞ。」

「泥^{どろ}のようにが。」

「うんにゃ。」

「草^{くさ}のようにが。」

「うんにゃ。」

「ごまざいの毛^けのようにが。」

「うん、あれよりあ、も少し硬^{こわ}ばしな。」

「なにだべ。」

「とにかく生^{なま}ぎもんだ。」

「やつぱりそうだが。」

「うん、汗^{あせ}くさいも。」

「おれもひとがえり行^いってみ^みべが。」

五番目の鹿がまたそろりそろりと進んで行きました。この鹿はよほどおどけもののようでした。手ぬ

ぐいの上にすっかり頭をさげて、それからいかにも不審だというように、頭をかくつと動かししましたので、こっちの五ひきがはねあがって笑いました。

向こうの一ひきはそこで得意になって、舌を出して手ぬぐいを一つべろりとなめました。にわかにかわくなったとみえて、大きく口をあけて舌をぶらさげて、まるで風のように飛んで帰ってきました。

みんなもひどくおどろきました。

「じゃ、じゃ、噛じらえだが、痛ぐしたが。」

「ブルルルルル。」

「舌抜がれたが。」

「ブルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。じゃ。」

「ふう、ああ、舌ちぢまってしまったたよ。」

「なじょな味だた。」

「味ないがたな。」

「生きもんだべが。」

「なじよだがわからない。こんどあ、汝あ行ってみる。」

「お。」

おしまいの一ひきがまたそろそろ出て行きました。みんながおもしろそうに、ことごと頭を振って見ていますと、進んで行った一ひきは、しばらく首をさげて手ぬぐいをかいていましたが、もう心配もなにもないというふうで、いきなりそれをくわえてもどってきました。そこで鹿はみなびょんびょんぴあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさえ取ってしめば、あどは何つても怖っかなくない。」

「きつともて、こいづあ大きな蝸牛のひからびのだな。」

「さあ、いいが、おれ歌うだらはなんてみんなまわれ。」

その鹿はみんなのなかにはいつてうたいだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手ぬぐいをまわりはじめました。



「のはらのまん中の めっけもの
 すっこんすっこの 栃だんご
 栃のだんごは 結構だが
 となりにいからだ ふんながす
 青じろ番兵は 気にかがる。
 青じろ番兵は ふんにゃふにゃ
 吠えるもさな⁽¹⁰⁾いば 泣ぐもさな⁽¹⁰⁾い
 やせで長くて ぶちぶちで
 どごが口だが あだまだが
 ひでりあがりの なめぐじら」
 走りながらまわりながら踊りながら、鹿はたびた
 び風のように進んで、手ぬぐいを角でついたり足で
 ふんだりしました。嘉十の手ぬぐいはかあいそうに
 泥がついてところどころ穴さえあきました。
 そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかになりまし
 た。
 「おう、こんだだんごお食ばがりだじょ」

「おう、煮だんだんごだじょ。」

「おう、まんまるけじょ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すっこんすっこ。」

「おう、けっこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになって、四方から
栃のだんごをかこんで集まりました。

そしていちばんはじめに手ぬぐいに進んだ鹿か
ら、一口ずつだんごをたべました。六びきめの鹿は、
やっど豆粒のくらいをたべただけです。

鹿はそれからまた環になって、ぐるぐるぐるぐる
めぐりあるきました。

嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶ
んまでが鹿のような気がして、いまにもとびだそう
としましたが、じぶんの大きな手がすぐ目にはいり
ましたので、やっぱりだめだとおもいながらまた息
をこらしました。

太陽はこのとき、ちょうどはんのきの梢の中ほど
にかかって、少し黄いろにかがやいておりました。
鹿のめぐりはまだだんだんゆるやかになって、たが
いにせわしくうなずきあい、やがて一列に太陽に向
いて、それを拝むようにしてまっすぐに立ったので
した。嘉十はもうほんとうに夢のようにそれに見と
れていたのです。

一ばん右はじにたった鹿が細い声でうたいまし
た。

「はんの木の

みどりみじんの葉の向ごさ

じゃらんじゃらんの

お日さんかがる。」

その水晶の笛のような声に、嘉十は目をつぶって
ふるえあがりました。右から二ばん目の鹿が、にわ
かに飛びあがって、それからからだを波のようにう
ねらせながら、みんなの間を縫ってはせまわり、た

びたび太陽たいようのほうにあたまをさげました。そうして
じぶんのところにもどるやびたりとまっとうたい
ました。

「お日さんを

せながさしよえば、はんの木も

くだけで光る

鉄のかんがみ」

はあと嘉十かじゅうもこっちでそのりっぱな太陽たいようとはんの
木を拝かみました。右から三ばん目の鹿は首をせわし
くあげたりさげたりしてうたいました。

「お日さんは

はんの木ぎの向むかひ、降りでも

すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし」

ほんとうにすすきはみんな、まっ白な火のように

燃えたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中なかさ立ちあがる

はんの木ぎのすねの

長ながんがい、かげぼうし」

五番目の鹿がひくく首をたれて、もうつぶやくよ
うにうたいだしていました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこの日暮ひぐれかだ

苔こけの野のはらを

蟻ありこも行いがず」

このとき鹿はみな首をたれていましたが、六番目
がにわかに首をりんとあげてうたいました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底そこでそっこりと

咲さぐうめばちの

愛あいどしおえどし」

鹿はそれからみんな、みじかく笛ふえのように鳴ないて
はねあがり、はげしくはげしくまわりました。

北から冷たい風がきて、ひゅうと鳴り、はんの木はほんとうにくだけた鉄の鏡のようにかがやき、ちんかんと葉と葉がすれあつて音をたてたようにさえおもわれ、すすきの穂までが鹿にまじっていっしょにぐるぐるめぐっているように見えました。

嘉十はもうまったくじぶんと鹿とのちがいを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすきのかげから飛びだしました。

鹿はおどろいて一度に竿のように立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のように、からだを

(注)

(1) 糧(四) 糠(炊いた米を干してかわかした食糧)のこと。食べ物。

(2) こいつば鹿さ具でやべか(五) これは鹿にやつてしまおうかの方言。

ななめにして逃げだしました。銀のすすきの波をわけ、かがやく夕陽の流れをみだしてはるかにほかににげて行き、そのとおったあとのすすきは静かな湖の水脈のようにいつまでもぎらぎら光っておりました。

そこで嘉十はちょっとにが笑いをしながら、泥のついで穴のあいだ手ぬぐいをひろってじぶんもまた西のほうへ歩きはじめたのです。

それから、そうそう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすぎとおった秋の風から聞いたのです。

(3) 口発破(七) 食べ物に発破(ダイナマイト)をしかけて、狐などをとる方法。

(4) なじよだた(七) どうだったの方言。

(5) 息の音あさないがけあな(九) 息の音はしなか